

# 未来の 大学教育を創る

Shaping the Future University Education

私たちは、大阪大学の教育支援機能・キャリア開発機能・  
学習支援機能の強化を推進し、主体的な学びによる  
教育の高度化を全学的に実現します。



## Future Faculty Program

### 大学院等高度副プログラム「未来の大学教員養成プログラム」

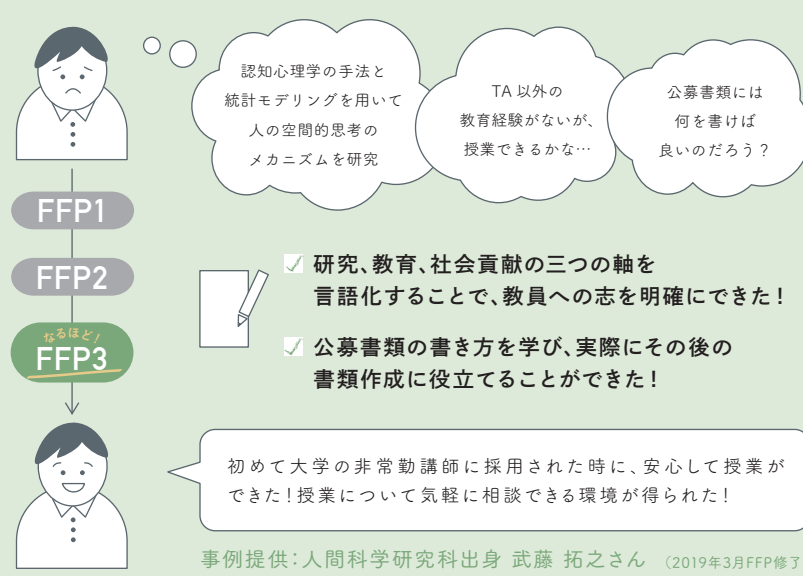
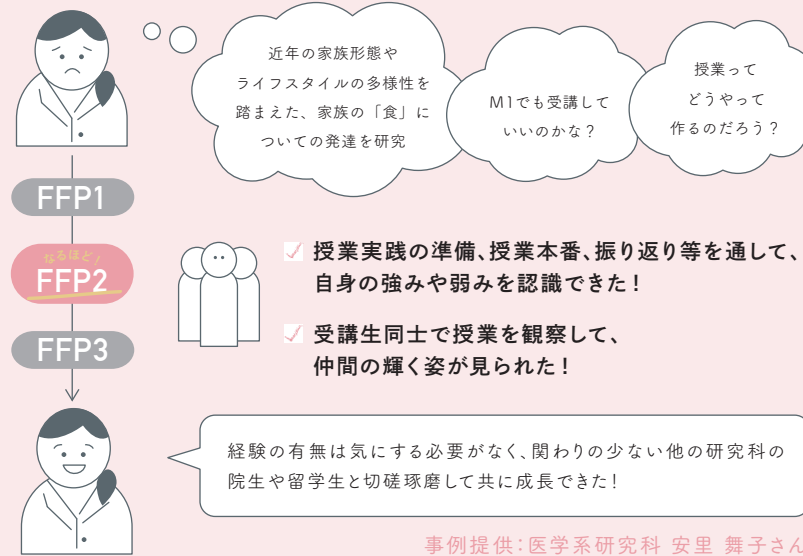
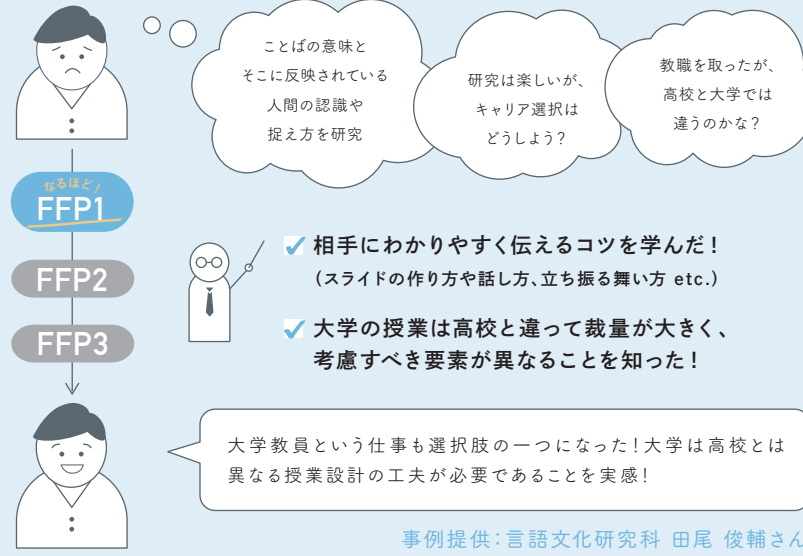
大学教員の皆様へ：全学教育推進機構教育学習支援部では、大学教員を志す大学院生向けに、教育力をトレーニングする本プログラム（FFP）を開講しています。ぜひ、大学院生にご周知ください。

大学院生の皆様へ：本プログラムでは、大学で教えるために必要な理論や教える技術に加えて、就職時の模擬授業や公募書類の書き方も学びます。大学教員志望者はもちろん、広く教育に興味がある方の受講を歓迎します。



どのように学んでいくのか？

## FFP学びの流れ 各分野のモデルケースをご紹介します！



## 現FFP受講生 × FFP修了生の

# 座談会

現役FFP受講生と修了生、それぞれが語るFFPの魅力とは？まだ大学の授業実践を担当していない受講生の不安に対して、修了生はどんなアドバイスをくれるのか？6人のメンバーで座談会をおこないました！

司会		修了生		受講生	
	<b>野瀬 由季子</b> 言語文化研究科 D2 (2019年3月FFP修了) 授業観察による現職日本語教師の変容を研究		<b>中屋 佑紀</b> 理学研究科出身 (2018年3月FFP修了) 土や水の中の「腐ったもの」の動き方や速さを研究		<b>アリザデ メラサ</b> 情報科学研究科出身 (2018年3月FFP修了) 先端技術を用いて言語や情報教育における学習支援を研究
	<b>松岡 隆生</b> 言語文化研究科 M1 学術的な文脈におけるヘッジ表現・プースター表現を研究		<b>李 頌雅</b> 文学研究科 D2 留学生とチューターとの授業外活動における言語学習の実践を研究		<b>遠藤 清人</b> 工学研究科 M2 次世代半導体材料の高性能化を研究

司会 → 受講生 → 修了生

### 学生との距離感をどう取るか？

- 野瀬：皆さん、お集まりいただき、ありがとうございます。今日のメンバーの中には、まだ大学での授業実践の経験がなくて不安を抱いている方もいる、とのことですが、教授活動に関して、すでに大学で授業を担当している修了生のお二人に、何か聞いてみたいことがある方は？
- 李：はい。私は今、TA（ティーチング・アシスタント）をしているんですが、教員が伝えたはずのことをTAの私に再度質問してくるんです。将来、自分が大学教員になった時、学生とうまくコミュニケーションが取れるか心配で…。しかも私は中国語が母語ですし…。
- 遠藤：私もコミュニケーションが不安です。FFP2での授業実践の時は、ディスカッションを取り入れることで学生と話そうとしたんですけど、時間管理に気を取られて、学生とやり取りが十分にできなかったんですね。
- メラサ：李さんと同じく、私も日本語も英語も母語ではないから、日本人学生とのミスコミュニケーションが生じることへの不安は分かります。私の場合、博士課程の時に大学で英語科目の授業を担当した時は、できるだけ英語表現を簡単にして、ミスコミュニケーションが起きないように工夫したり、どうしても、という時は日本語でも話したりもしていました。
- 李：なるほど。



- メラサ：でも、言語のスキルだけでなく、授業でのコミュニケーションにおいて重要なことの一つは、「教育技法の理解と応用」かなと思います。FFP1と2で、動機づけのメカニズムやアクティブラーニングについて学ぶと、学生の知識理解や技能獲得の仕組みがわかってきて、様々な授業技法を適切に活用できるようになる。そうすると、いつ、どんなふうに学生に話しかけたりサポートしたりすればいいかが見えてくると思います。
- 遠藤：たしかにそうですね。私も、学生のモチベーションや目標を知るための切り口はFFPで見つけられました。
- 中屋：私は、塾講師と大学での非常勤の経験もあったし、コミュニケーションへの苦手意識はありませんでした。ただ、FFP1と2で、情報の構造化の仕方や、既知の引き出し方など、体系的に教育学の知識を学んで、これらにより意識を向けるようになりました。

### 初めての授業実践が不安…

- 松岡：私も相談したいことが…。
- メラサ：ぜひ聞かせてください。
- 松岡：今年の4月から中学・高校で非常勤講師をする予定なんです。大学の授業担当とはまた違うかもしれないんですけど、1年目の非常勤には、学校側からどんなスキルを求められるものなんですか？今から何かできることがあれば、と思っていて…。
- 中屋：なめられないこと（笑）
- 一同：（笑）
- 中屋：まあ、つまりは雰囲気づくりがまず重要だということです。寝てもいい授業だな、とか、タメ口でもいいな、とか思わせてしまおうと、生徒・学生は授業モードに入れない。
- メラサ：わかります。英語の科目だと、学生の動機づけとエンゲージメントを高めるのが大変だから、私は学習しながら楽しく感じる授業を心がけていたかな。ちなみに、私が非常勤をしていた大学では、既に大学でシラバスと教材が決まっていた。
- 中屋：非常勤だと、シラバス作成から完全に自由なパターンもあれば、医療系のようなテスト的なゴールのあるパターンと、いろいろありますよね。
- メラサ：はい。統一した授業の内容を複数の教員で担当することもあるし。
- 野瀬：あっ、雰囲気づくりに加えて、私がFFP1と2を受講して気づいたのは、自分が担当しているこの授業は何を目指しているか、要は、授業の目的や到達目標を教員側が見失わないことの重要性です。それがわかると、毎回の授業の構成も計画できる。そうすると、目の前の学生に応じた対応ができるんじゃないですかね。
- 李：そういえば、たまに大学の先生が、授業の構成についてTAの私に意見を求めてくださることがありました。
- 野瀬：先生は、ご自身の授業が自分以外の視点からはどう見えているのか、知りたかったのかもしれないね。
- 中屋：うんうん。授業のパターンも教育技法も様々で、これが正解、っていうものはない。松岡さんみたいな人にも自分の授業を見てもらったり、機会を見つけて、他者の授業を見たりするのがいいかもしれないです。
- 松岡：ありがとうございます。私の場合は、割と自由な授業実践ができるので、みなさんからアドバイスを聞いて、私なりのオリジナルの授業を組んでいきたいです。



### 阪大ってホンマ University ！

- 中屋：こうやってFFPでの学びを振り返ると、阪大はUniversity（総合大学）だっということ思い出さうという…。学部1年生の時は、他学部の学生が集まる全学共通教育科目を受けるのがすごく楽しくて、気合を入れて受講していたんです。でも、学年が上がって専門が増えると、自分の身の回りのサイエンスだけ勉強している状態になっていきました。でも、D1の時にFFPを受けてみると、いろいろな研究科の人たちが集まっています。そこで阪大はいろいろな分野の学生がいて、まさにUniversityであることを思い出したんです。
- 松岡：確かに、いろいろな研究科の人たちと話す中で「こういう考え方もある！」と、全然違う視点を知ることができそうですよね。忘れかけていた知的刺激があるところがとてもいい。
- 中屋：専攻の垣根を超えた大学院生向けの授業はFFP以外にも沢山あって、そこでは授業で扱う特定の話題について様々な視点から議論ができますよね。FFPなら、それに加えて各々の学問分野自体を分りやすく伝える機会が充実している。自分の専門と異なる学問観、知識観を知ることができるのは、FFPならではのメリットじゃないかな。



- 野瀬：それを聞いて思い出したのは、FFP1の授業で10分の模擬授業をやって先生方からコメントをもらいますよね。その時の先生方のコメント力がすごくて！専門領域が違うのに、パツッと心に刺さるコメントができるのは、自分の専門分野以外の考え方や現状に対する理解があるからだだと思います。
- 遠藤：大事ですよね。私は大学教員以外のキャリアを選択する予定なんですけど、FFPで学んだ教育理論を活かして、将来は部下に気づきを与える、指導力のあるリーダーになりたいです。
- 野瀬：本当にFFPは、多様な学生が集まる場所ですね。いやー、話はまだまだ尽きない…。
- 中屋：私は、現在、FFP修了生が自主的に立ち上げた「大阪大学若手FD研究会」に所属しています。FFP修了後も、学問領域を超えて交流できる機会がありますよ。
- 野瀬：またそこで今日の続きもお話ししたいですね！皆さん、今日はありがとうございました！
- 一同：ありがとうございました！